

いた。

今やあの時の主演達はなりをひそめたとされる。彼らもまた“おとな”になって行ったとも言われる。しかしその嵐の60年代を終え、70年代の後半に入ろうとしているヒッピー発祥の地サンフランシスコを歩いてみて私は見た。60年代に奇異に見られたあのヒッピースタイル、粗野な開拓時代を思わせるジーンズ、もみあげ、ひげ……若者を表現していたその風俗が、老人層に至るまで浸透しているのだ。革命は進行しているように思えた。チャールズ・ライクの“緑色革命”は起こるかも知れないという気がして来た。60年代の主演達は後退し、体制に反対する事をあきらめ、放棄したとは私には思えなかった。ただエネルギーを全て外に向け、力と示威のみで対決するという事をしばらくやめている。権力と体制による矛盾の基盤を自己の中にも探求しようとしているように思えた。マイケルは言った。自分達は決してアメリカを代表していない。自分達のような考

えを理解し、興味を示すのはアメリカでも、ニューヨーク、サンフランシスコ、ロスアンジェルスに住む人々くらいだ。中でもサンフランシスコは特別な町だと。

しかし自らをブルーワーカーだと語る私の友人達が、自己探求のセミナーに高い関心を示し、積極的にそれに参加し、また私の心理学にも興味をもって耳を傾けた。そしてこのような人々がそこには多く生活しており、増えつつある。多くの人々が西へ西へと移動し、カリフォルニアの人口、シスコの人口は増えつつある。

いみじくも、ヒッピー発祥のその同じ町から何が起ころうとしているのか、何が展開されて行くのか、私には何よりも興味深く感じられた。

今回は、この見聞と経験を私の日本での体験、つまり学生相談や臨床活動との関連に於て考察してみようつもりである。

(学生相談室助手)

## Enthusiasm

天 野 實

大学を卒業して以来、国内、カナダ、米国における6ヶ所の大学又は研究機関で生物学、基礎医学の教育および研究に従事して来ましたが、現代の生命科学の発展には旧来の学科別教育研究体制は非常に具合が悪いことを痛感していました。広島大学においてこの点に関してまさに画期的な組織改革を行い総合科学部を創設されたことを知り、はからずも当学部へ赴任することになり大変嬉しく、かつお招きいただいた事を感謝しております。

私の好きな言葉の一つに“Nothing great was ever achieved without Enthusiasm.”と云うのがあります。あえて英語で書いたのはenthusiasmを日本語に訳すとどうもびったりしないからです。熱心、熱中などという感じのものではなく本当に他人がみたら気違いか“狂”になる位に或ることをやり遂げたいという気持を相当長期間にわたって持ち続けなければ偉大なことは出来ないものだろうと思うからです。我々の分野では、何か一つの現象についての理解を深めて行こうとすればどうしても色々なレベルでの仕事、即ち光学顕微鏡レベル

での観察、電顕の微細構造、高分子物質の抽出、その存在状態の解析等々が必要になり、旧来の学科などにしばられて勉強し考えていたのでは到底何も研究は出来ないといっても過言ではない現状です。研究者相互間ではすでに専門分野といわれる壁は個人的なつながりによって破られているにも拘わらず、制度的には仲々むつかしい問題があるようで、今迄のような形では進歩発展の速い自然科学の世界的レベルからどんどん取り残されてしまおうと思えます。

大学卒業後、当時細胞学と化学の境界領域としてその必要性が認められて新しく生まれた新しい名前の山口県立医科大学、「細胞化学研究室」でどうしてもやりたい仕事をする事になり、次には形態と結びついた生化学的研究として核酸に関するラジオオートグラフィーの仕事をしたためにカナダへ行き遂には国立がんセンター研究所で現在の分子生物学を強く指向した、これまた新しく出来た新しい名前の「細胞生物学研究室」でがんに関する基礎的な仕事をする事が出来ました。更に今度は広島大学総

合科学部でこれまた日本では初めての「細胞生物学・発生生物学研究室」で働くことが出来、研究生活の最初にとりつかれた発生生物学の問題の一つである“分化”を今迄の仕事の基盤の上に総合科学部にられる色々な専門分野の方達と一緒に研究して行くことに欣喜雀躍としている次第です。まだまだほんとに短い私の人生を振りかえってみても確かに“運”ということを感じないではいられません。たまたま広高時代、文化祭での講演を聞き、その話の中に出て来た人を大学時代に恐る恐る尋ねて京都まで行って御会いた人、鈴木三重吉の赤い鳥の一節にひかれて中国山脈へ夏休みに来られ、宿泊所の少なかった当時の広島で我が家に泊られた人、宇部に行っては隣りの研究室で一心不乱に研究しておられた中学高校の大先輩、英語の下手な日本人青年を科学する心についてそれはそれはきびしくきびしく指導して下さったフランス系カナダ人、全人間の生活態度から色々なことを無言のうちに教えられたこれらの人々との出逢い、これなどは大きく偶然に左右されたことは確かです。しかしその偶然の出来事をどのように受け止め、どのように進展させて行くかはやはり自分自身の側によることも多いのではないのでしょうか？何か自分でこれがやりたいというものがあ、それについて何か合い通ずるものがある、始めて次の段階へのエネルギーともなり得るものではないのでしょうか？

日本の昔の人は今書いたようなことを含めて“運、鈍、根”などと表現したのでしょうか？何かをやり遂げるには運が最も大切であるが、鈍重で根気よく続けることも必要である。或は愚鈍と思われる位に根気よく一つのことを遂行すれば必ず運も開けてこよう、沸々とした情熱を心に秘めていることは感じられるのだけれども、もう一つ何か積極的なものの欠如とか不足といったことに抵抗を感じないではいられません。「石の上にも3年」他の人がやるのと同じことを同じようにやってたのでは短い自分の人生が面白くない。がむしゃらな行動性が是非欲しいと思うのは私個人の性格によるのかも知れませんが……。Enthusiasmという言葉を始めに書いたのはこの言葉には何かしら行動力が秘められているというのではなく、確立された自我の上に狂ほしい程の行動力がほとぼり出てくるようなものが感じられるからなのです。

人間の社会では新しい組織を作った時には必ず今迄にない何物かを作ってやろうという意気込みというか、すばらしいエネルギーのようなものが出てくるものです。20世紀後半の複雑な世の中で人間社会とのかかわり合いを常に考えながらも、自分の知りたいこと、生物・医学の問題である“分化”についての研究を元氣一杯頑張ってやって行きたいと思っております。

## 《流動への反抗》

(戦中刊行思想書を読む)

石井直人

今日の朝刊の第一面のトップに『児玉を外為違反で起訴』という大見出しでロッキード事件の警視庁特捜本部が児玉を外国為替及び外国貿易管理法二十七条違反容疑で東京地検に書類を送検したことを報じていた。これで工作資金の入りについてはほぼ解明されたわけで、事件の全容の一端が白日のもとにさらされたわけだ。しかし資金の出どころである贈収賄の方が残っているわけで完全解決には、さらに長期を用することになろう。周知のとおり右翼の大立て物一児玉は戦中、児玉機関を組織、大陸においてさまざまな悪らつな行為によって私利をむさぼってきた。※注1そしてそれは又、長い長い日本帝国

主義による大陸支配の流砂の様相を現代の我々に教えてくれる貴重な材料でもある。そこで、私はこうした帝国主義支配の流れに注目し、かつて戦中に書かれた思想書の一つピックアップして、拙文ながら戦時下における日本の思想家の抵抗、同調の事実を追ってみようと思うのである。

\*

南原繁の『国家と宗教』の第四章に「ナチス世界観と宗教」という一章があるが、当時同盟国であったナチスドイツに対する思想的、宗教的批判が、述べられている。(この『国家と宗教』は昭和17年11月に発行され、ちなみに日本は、同年6月にはミ

ッドウェー海戦、12月にガダルカナル島作戦で敗北し、これ以後日本の戦局は日々悪化の一途をたどることになる。) 同章、二節の「ナチス精神と其の世界観の基礎」には、ナチス勃興の現状への鋭い分析が加えられている。つまり、ナチスが、ヨーロッパ「近代精神」とその帰結に対して反抗し、その国家的政治形態の中軸として、新しい世界観とも言うべき「民族共同体の最高の組織的現象形態」、換言すればドイツ固有の「ライヒ」※注2に該当する有機体的統一として民族そのものの理念を見ることができるとする。これは民族共同体が中心であり、近代「個人主義」に対する民族「全体主義」の主張であり、こうした民族こそが生の根本形態であって、全て世界観や諸科学はここより出ずというような新しい倫理は必然的に民族的全体者への没入、即ち全体に対する個の服従と犠牲の精神の昂揚となって現われると述べ、その後ヒットラーの文を引用している。「共同体の存在のために自らの生命を捧げることによって凡ての犠牲の冠が置かれる。……(中略)……かかる行為の生ずる原則的な心情を吾々は一利己心や我欲とは区別して一理想主義と呼ぶ。吾々はその名の下に唯、全体性に対する又同胞に対する個々人の犠牲能力を理解する。」このヒットラーの言葉の中に南原はゲルマン人において道德の確立は人間人格の「自由」にではなく、かかる民族の「名誉」に於てであることを観ている。ところで、上戴文の「理想主義」(実践的理想主義)の精神の高揚について南原は、これが近代ブルジョアジーの功利主義道德並びにプロレタリアートの同じく快楽主義的倫理、理想に対する反立や第一次大戦後のこの両面からの浸潤による国民の精神的・肉体的頹廢と苦悩の体験を背負っていて、滅亡から時代を救わんとために興った当然の精神運動と述べながらも、その後頁には、このヒットラーを中核とする理想主義を従来の浪漫主義に対する新浪漫主義と称している。その根拠を問えば、古き浪漫主義の根本理念であったところの動揺する力としての生を現実的な民族的生としての「種」の核心—民族的の心霊なる「<sup>ラッセン</sup>人種魂」—にまで掘り下げた点に在るからであるとする。注目すべきなのはそのあとに南原が「舊き浪漫主義が廣く民族を立ち超えて世界主義と世界文化理想に赴いたのに対して、この新しき浪漫主義は民族文化と民族国家の理想に終始することである。これによって前者の寧ろ非政治的にして審美的なる『静寂主義』

(Quietismus)に対して、後者の積極的にして政治的な『行動主義』(Aktivismus)の性格を形成する」と指摘しているが、ここらあたりから明らかに浪漫主義と新浪漫主義の比較叙述によるナチズムへの批判が背後にあることがうかがえる。そしてさらにローゼンベルクが「理性と批判によっては何もかも創造せられず、創造的原理たるものは独り人種・種族のみであり、北方系ゲルマン人種これは環境によって制約せられず、却って自らの歴史と生活圏との積極的な形成原理である。」と言う根本に南原は“血の理念”を觀、一種の「生物学」的立場※注3に通ずるものであるといっている。

さてここで、我々はナチズムとニーチェとの重要な関係を無視するわけにはいかない。両者共に活力としての生自体を原理とし、生の昂揚を旨とするところに於て、根底に生の哲学思想がある。ただニーチェの場合は、全体としての人類、殊に“神無きあと”のヨーロッパを如何なる方向へ向わしむべきかが課題であり、ヘーゲルのイデアリスムスに対するラジカルなリアリスムスの系譜の延長上にあるぎりぎりのニヒリズムの淵に立った後に、生への転回が行なわれたわけで、そのために偉大なる個性—超人を中心として、その最高の訓育と養成による人類の高揚が主要事であったのに対して、ナチスは前述した創造的生命原理によって力動しえる純粹優秀人種としての超民族を中心にするのが重要であった。故に、必然的にニーチェ思想の持つニヒリズムを通じた精神性よりも、理念を表面におしだした形の現実主義的傾向がナチズムの中で強まっていった。そこでナチズムの危険性が説かれることになる。つまり、ナチズムにおいては、全ては生の活力の増進の程度による価値尺度によって計られ、従来の精神文化的価値に対しても極めて気分的な「運命価値」なるものがすえられることになる。これはheroischな諸徳やゲルマン神話を理念として志向する傾向と密接に関連しているだろう。「運命価値」重視が極端化すると一般文化否定と破壊に向う可能性を含み、自律的人格価値や精神的個性としての自由の意義の喪失をもたらすのではという予感が南原の中にあっただ。 (500万人以上のユダヤ人やパルチザンがアウシュビッツその他の強制収容所で虐殺されたことによって南原の危惧は不幸にも的中したことになる)

ここに至ってナチズムの最も根本的な特徴の一つが浮彫にされてくるであろう。つまり、ナチズムは

精神的・理想主義的要素を仮面にしてその裏に野性的、現実主義的要素をかくし、両者を混有した上に立っているということである。南原はこれを「『デモニッシュ』な性格として特質づけることが出来るであろう。」といい、「それは人間における何か動物的・反精神的な衝動（最近、フロムは、これをナチズムの残虐性に見る人間の破壊衝動〈ネクロフィリア〉としているが）を意味し、創造的要素と破壊的要素との結合又は二重性、或は精神的と反精神的との対立又は二重の弁証法的要素」と述べている。ヒトラーが『わが闘争』や大演説会で熱唱した、「理想主義」なるものは、根本に自己中心性の権力意志があり、国民に対してはまことにすばらしい説得力を示し最も美しい型で完結せられた合理的な論理と信じられていたが、彼の唱える民族としての創造が他の民族の破壊を潜在的に前提としていたことにおいて、全くのせ「理想主義」＝「現実主義」になるのは当然であった。

それではドイツ国民がヒトラーを受け入れた原因はどこにあるのだろうか。ナチの全体主義に動員されていったドイツ人の責任は二つの観点から見る事ができる。そのひとつは、合法的に導かれたナチの独裁をドイツ人自身が招いたもので、ドイツをヒトラーが強大な国にしてくれると信じるがために承認せざるをえず、反抗するだけの勇気ももちえなかったというもので、もうひとつの見解は全てのドイツ人が反良心的であるわけではなく、当時は良識的な人々もまんまとヒトラーとその追従者のペテンにかかりほとんど手も足もなかったとする。もちろんこの主張は一面では真実を含むが、ドイツ国民自身の国民的特質にもヒトラー承認への要素を窺う事ができる。つまり、ドイツ国民は数世代にわたって、「服従、完全主義、規律と秩序愛、個人尊重に優先する国家尊重、指導者への服従等」（「アドルフ＝ヒトラー」ルイス＝スナイダー）の教育をうけてきたことである。イギリスの歴史家A, J, P, テイラーによる次の指摘の一節がその背景を示してくれる。

「ドイツの歴史はとりもなおさず両極端の歴史である。…（略）…彼らはヨーロッパを支配したこともあるが、他国による苛酷な支配の被害者となったこともある。ヨーロッパでも前代未聞の自由を享受したこともあれば、同様に前例をみないほど苛酷な専制政治の犠牲者となったこともある。彼らは最も

卓越せる哲学者、精神的な音楽家を生むと同時に、最残忍で無法な政治家をも生み出した。…（略）…中庸の道をわきまえた人間—そうした人間だけがドイツの歴史にいかなる足跡もしるさなかった。…

（略）…ドイツの歴史にあっては、両極端に激しく揺れ動く振子運動だけがノーマルな状態なのである」（A, J, P テイラー『ドイツ史の進路』）純粹に自国への民族的アイデンティティーを求めてやまない者ならばまず他国、他民族の中の“自ら”を尊ぶであろう。しかし、“やさしきもの”はついに圧倒的なbrutalな流動の前に完全な反抗を貫き通すことはなかった。

＊

さて南原は次の第三節『ナチス世界観に於ける宗教理念』でナチズムとキリスト教の問題に種々な観点から立ち入っている。

ずっと述べてきた様にナチズムは自由主義、マルクス主義等の近代実証的合理主義あるいは社会科学精神の帰着した宗教否定、神の死の傾向に対比して一つの宗教的生命の概念を根本にすえていた。ローゼンブルクの言うごとく「一切の上に進り出づる流れが一つの中心から注ぎ出さねばならなかった」のである。そしてナチズムはその中心点に「魂」—自由にして偉大なる心霊を置いた。ここで14世紀のドイツ神秘家マイスター・エックハルトがナチズムへの最大の思想的先駆者とされる所以がある。

ところが、ナチスはエックハルトに依拠したごとくに「人間に於て最も高貴なるものは血である—それが正しきを欲するならば。併し、人間において最も凶悪なるものも亦血である—それが悪を欲するならば」という一節をひくが、エックハルトはそういった民族的・人種的「血流」云々を意味したことは言っておらず、内なる神への価値原理が歪められて使用されていた。これに対し南原は、「かかる悪しき引用は却って自己破壊作用を現わさずには措かぬであろう」とはげしく批判している。ちなみにエックハルトの思想は西谷啓治によれば、「霊の内に於ける神の誕生」と呼んでいるところにあり、神と霊との関係が人格的關係（従来のキリスト教思想もそしてまた現在もこの人格的關係以上の視野に立っているものはわずかである）を通してさらにもう一段此岸的に超えた所、超人格的もしくは非人格的な人格的關係に立つのである。故に禪で言う絶対否定、絶対無を基点とする転回の論点も見られ、「突破」